Title	ヘッセとキリスト教
Author(s)	宮崎，泰行
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume13, 1998.12 : 65-76
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3197
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ヘッセとキリスト教

宮崎　泰行

ヘッセの死後、その遺稿や書簡を精力的に編集している編集者Volker Michelsによって、近年、メーリングリストを通して、ヘッセに関するあるエピソードが伝えられた。それによると、一九三三年、ヘッセは出版社との間に、更に五年間の延長契約更新を行ない、その際に、Gottfried Bermann Fischer と Peter Suhrkampの両名が署名をし、ヘッセが更に手書きで以下のような付記を付け足した。「出版社がより高次の力（国家権力、戦争、インフレーション）により、著者に対する義務の履行が妨げられるようなときには、この契約は著者に対して拘束力を持つものではない」(1)。現在の立場から見れば、単なる文言のようにみえるが、自身の作品の印税、発表紙を取り上げられ、同胞から裏切り者呼ばわりされ、経済的精神的に追い詰められた状態での決断であることを思うと、その決意のただならなさに驚嘆の念を禁じ得ない。おのれの信念をいかなる状況であっても貫き通す姿勢が見えるエピソードである。ヘッセというと、初期の甘く悲しい調べに満ちた、感傷一辺倒の作家のように一般には受け取られているようであるが、その内実を見つめ続けると、一筋縄ではいかない芯の強さを認めないわけにはいかない。時間的な順序では逆になるが、

第一次世界大戦のさなか、強度の近視のため兵役を免除されたヘッセは、戦争捕虜に本を送り届ける作業に従事していた。自分の創作のための時間も削らざるを得ないほどの作業量だったようだ。また、伝えられるところでは、ヘッセは晩年に至るまで、世界中から届く、文字どおり山のような手紙に対して、持病とも言える頭痛や眼の痛み、加うるに体力の低下に耐えながら、返事を書き続けていたという。大部分の手紙の差出人たちよりも、先に生まれた者として、様々な問題に遭遇し、行き詰まり、四壁をみな閉ざされたような絶望的な状態で、必死に活路を見いだそうとした自分の体験をふまえ、語り、伝えるのが自分の役目でもあるかのように、絶えず返事を書いたという。上に紹介した、目に見える具体的な活動の背後に、しかし、我々はその行動様式と思考様式を規定している一筋の線を認めることができる。それをわれわれは強烈な個性、不屈の自我等と呼ぶこともできるだろう。ヘッセ自身は、では、どんな言葉でこれを表現していたのだろうか。著作集からそれを探すとすればEigensinnが一番近いように思われる。

一九一九年、ヘッセは分量的には少なく、かつ一般にはあまり受け入れられなかったと思われる*Eigensinn*（我意）と題する評論文を公にした。この評論で彼が主張しているところを要約すれば以下のようになるであろう。

芸術の世界ではEigensinnは独創性としてもてはやされるが、一般の世界ではそうはいかない。むしろ、それは表現を改められ内容の変更を受けた（たとえばCharakter節操、Originalität独創性）のちでも受け入れられるか否か定かではない。Heldの概念が一般人のそれは矛盾している。戦場で戦死した兵士に対して本来「英雄的な死」はあてはまらない表現である。また、工場での業務災害などに関して、「悲劇的」と言う言葉を使うのは適切ではない。自分独自の考えを持ち、高貴な自然な意志（Sinn）をおのが運命となすことこそ英雄の特徴である。そして英雄こそ悲劇的なのだ、と主張する。彼らは「従順」ではない。自分本来の意志（Sinn）を頑くななまでにおしとおし、それをおのれの運命としてしまう人物である。彼らにこそ「悲劇的」という言葉はふさわしい。宇宙に存在するありとあら

ゆるものは自分のSinn（こころ）を、自分独自のGesetz（きまり）をもっていて、それに従って生きている。悲劇的英雄は人間が決めた規則に反抗することは暴挙ではなく、より高次の神聖な規則に忠実ならんとすることだと喝破している。他人に対する（あるいは集団に対する）利益となるような行為は称賛の的となるが、自分自身の利益にしかならない行為・思想は称賛どころか非難の対象とさえなる。Eigensinnの持ち主、彼は英雄であり、悲劇の人であるが、まさに「自分自身の利益にしかならない行為・思想」を頑くなに守り通す。

このEigensinn故に彼は一方ではキリスト教的ドグマに対して忌避的態度をとるにいたる。ドグマに従うことはgezähmt（飼い慣らされた）な状態に陥ってしまうということだ。その結果、特定の宗教ということではなく、Religiosität（宗教性）ともいえるような態度へと傾いていった。すでに一三才の頃、「詩人になるか、さもなくばなににもならないか」と誓ったというエピソードに見られるように、根底には激しいEigensinnがある。

カトリックの神学者ハンス・キュングはヘッセの態度に関して以下のように言及している。

So ist Hermann Hesse zum Sprecher all derer geworden, die an einen dogmatischen erstarrten, moralistisch verengten und recht haberisch-intorelanten Christentum zu verzweifeln begonnen haben.(2)

「そのようにヘルマン・ヘッセは教義的に硬直化し道徳的に狭小な、独善的で非寛容的なキリスト教に対して絶望し始めていた人たちの代弁者になった。」

ヘッセが、教義的に見て硬直化しており、道徳的には狭隘な態度のキリスト教に絶望しかかっている人々の代弁者になった、とキュングは主張する。このドグマ拒否（ないし忌避感）の態度は論理的に当然のこととして、それを生み出しそれによって維持され、守られてきた「制度としての教会」に対する不信感へとつながっていく。「教会」と

は、しかし、ヘッセ自身がその中で産まれ育てられてきた、いわば、母胎とも言えるものである。この母胎とも言える教会に対するこの態度は何に由来するものなのか。ヘッセの家庭的伝統に目を向けてみよう。

ヘッセの家庭にあっては敬虔主義の伝統が色濃くあった。母方の祖父ヘルマン・グンデルトは、自身もマウルブロン神学校で基礎的神学教育を受け、テュービンゲン大学でさらなる研鑽を積み、宣教師としてインドに赴任した。語学の才能に恵まれ、マラヤラム語の辞書を編纂した経験もある。彼の地の言葉をすぐに習得し、短期間のうちに説教もできるようになった。父はエストニア出身で一八才のとき宣教団体に手紙を書き、宣教師になるべく勉学を重ね、修学後ヘルマン・グンデルトと同じ宣教団体に加わった。母親はもともと芸術的な天分を持っていたのだが、あることをきっかけにその天分を用いることを意識的に避け、以後もっぱらその力を宣教活動に振り向けていった。(3) 父母もまた、祖父母の後を追うようにインドでの宣教経験を持つ。帰任後、一家は西南ドイツの小邑カルプに落ち着いた。祖父はその地において、伝道団体の手伝いからやがてその責任者になり、そのかたわら海外宣教師が一時帰国などで帰ってくるとしばしばもてなし、集会を開いたという。父はそんな祖父の手伝いをしていた。

さて、カルプの属するヴュルテンベルク州では昔から敬虔主義の伝統が脈々と受け継がれているという。敬虔主義の発祥の地ではないが、独特な雰囲気で敬虔主義が根づいているということだ。その一例になるかと思うが、現代においても、キリスト教のさまざまな集会で、神学を専門に学んでいる学生が、聖句を暗唱して自分の血肉としてしまっているような老農夫にやり込められる場面が見られるという。この地の敬虔主義は、聖書主義、内面性を重視する傾向、生活に根ざした信仰姿勢などがその特色となっている。

この家庭の雰囲気を伝えるものとして、ヘッセの神学校脱走事件に対する応答を挙げることができる。

Um fünf Uhr kommt der Postmann und ruft vor der Stubentür laut: Ein Telegramm! Ich eile hinaus und denke, es melde am Ende des neunzähligе Vaters Hesse Heimgang. Doch nein-es ist aus Maulbronn, ・・・»Hermann fehlt seit zwei Uhr. Bitte um etwaige Auskunft.«(4)

「五時に郵便配達人がやってきて書斎の前のドアのところで大声で叫んだ。『電報です。』私は出て行きながら考えた、九〇才になるヘッセの父親の逝去の知らせだろうと。でも違った。マウルブロン神学校からだった。・・・『ヘルマンが二時から見当たりません。至急、連絡をお願いします。』」

母親マリーの日記からの引用である。ヘッセに関する諸家の手になる伝記では、この神学校からの脱走事件は、必ず触れられる部分だが、マリーの筆になる日記を直接読むと緊迫感が感じられる。さらに、

Zuerst hatte mich die Angst, Hermann sei in die besondere Sünde und Schande gefallen, es sei dem Entweichen etwas besonders Böses vorausgegangen, ganz qualvoll gefolgert, so daß ich ganz dankbar wurde, als ich endlich das Gefühl bekam, er sei in Gottes barmherziger Hand, vielleicht schon ganz bei ihm, erlöst, gestorben. In einem von ihm so bewunderten Seen ertrunken? ...ich meinte schon, das Kind im Grunde des tiefen Sees liegen zu sehen.Und doch kam dabei Frieden und Ergebung in meine Seele.(5)

「まず最初に私が心配したのは、ヘルマンが特別な罪を犯したか不名誉なことをしでかしたのではないか、何か特別悪いことをして逃げたのではないかということだった。悩み苦しみながらも、あの子は情け深い神様の御手のうちにあって神様の御許にあって救われており、なくなっていると思ったら、感謝の念さえ湧いてきた。あの子は大好きだった海でおぼれているのではないかしら?・・・あの子がもう深い水底に沈んで

いるのが見えたような気がした。そのとき、私の魂の中では平安と諦めの気持ちがあった。」

上記の箇所でも触れたが、多くの研究書ではヘッセの神学校脱走事件の影響のみがとりあげられているだけで、マリーの対応についてはほとんど触れられていない。慌ててはいるものの、ヘッセが神の御手のなかに守られてあること、よしんば他人から見て一見不幸な結果になっているとしても、大好きな湖の底に溺れているのだろうと思えていることなどが見てとれる。何か重大な不幸なことが起こっても、それを神にゆだね、その結果を感謝をもって受け取れている姿勢がうかがわれる。このような信仰の姿勢が子どもに影響を与えないはずはない。ちなみにこのような観点から書かれた研究書を筆者は寡聞にして知らない。おそらく、そこまで踏み込んで書くと、「研究」という領域を踏み越えてしまうという判断であろうが、筆者は表題のとおり「ヘッセとキリスト教」を掲げているので、あえて踏み込んで記したことをことわっておく。

さらに、彼の*Mein Glaube*という評論を見ると、「教会」からは宗教的体験のいかなるものをも受けたことがないと書かれてある。これはおそらく、「教会」から彼はSpeisung「(霊的)食物」を受け取ることができなかったことを指すものであろう。しかしながら、聖書を読むことからは生き生きとした体験を味わうことができたのみでなく、楽しみであったようだ。後年の詩人としての感性が、信仰者としての感性にまさり、後者を圧倒していたということだろう。

*Mein Glaube*をさらに検討してゆくと、彼のキリスト教に対する懐疑は父や祖父の態度に影響されているとみることができる。彼らがなぜ懐疑を引き起こしたかと言えば、プロテスタントはカトリックに比較して確固とした教理、信仰箇条、人間の感覚に訴える儀式や典礼を極端に少なくしてしまっていること、プロテスタントの教会がカトリックのそれと比べて、無数といってよいほどの群に別れてしまっており、一体感が実感しがたいこと、それゆえ人間の

五感で感ずることができる要素が少なく、いきおい意志と知識の面にかなりの強調点がおかれることになるなどの理由が考えられる。[6] これらの理由の当否はさておくとしても、ヘッセの目にはこのように映ったことは否めない。壮大なヒエラルヒーをもち、宗教的な統一体であるばかりでなく、精神的、文化的統一体でもあるカトリック教会と比較すると、プロテスタントはいかにも存在基盤が弱々しくみえたのであろう。父や祖父の態度の中に信仰基盤の裂け目ともいうべき箇所をみいだした（と考えた）ヘッセに対する影響は少なくなかったであろうことが推察される。以上のことから導かれる論理的帰結として、このことが、ヘッセにキリスト教から一定の距離をとらせる遠因として作用したと考えてもあながち不当なこととは言えまい。しかし、彼の場合、キリスト教とは一定の距離を保ちつつも、キリスト教そのものから完全に離れ去ることなく、強い引力に引き寄せられるかのようにいわば楕円的な軌道をとりながら、キリスト教の周縁をめぐっているように思われるのである。

以上の点から、ヘッセの触れていた家庭、教会はシュミットの主張する敬虔主義の特徴とも重なる部分を持つと推測することができる。

「制度的教会に対する忌避感ないし不信感を敬虔主義は持っている。大胆かつラディカルで、破壊的な力を秘め、神秘主義的スピリチュアリズムがはぐくみ、敬虔主義が緩和した考え—教会なきキリスト教、したがって、既存の教会性に対立するキリスト教がありうる」[7]

Eigensinnに関して注目すべきもう一つの点は、シュレンプフに関する発言である。この人物は、敬虔主義の影響下に神学研究の研鑽を積んでいたが、信仰的には次第に自由主義の立場に接近し、従来の信仰箇条にはもはや従い得

ない状態となり、ついには自身の牧会していた教会を去らねばならなくなった。後にキルケゴール翻訳に進み、その分野で知られている。そのあたりの消息をヘッセは次のように伝えている。

「一八九一年、ヴュルテンベルクの教会である騒動が持ちあがった。この騒動の波紋は牧師や神学者たちばかりでなく、ヴュルテンベルクのプロテスタント信者たちにも大いなる動揺を与えたものであった。クリストフ・シュレンプフという牧師がみずからの良心に照らしてはもはや教会での職務を執行できないほどになり、結局は牧会から身を引くことになった。」(8)

自身の信仰的な姿勢の変化が原因であった。ヘッセはこの人物と自分との共通点をどこかに見いだしたのであろう。その共通点というものを筆者なりに推測すれば

Etwas sehr Einsames und beinah Fanatisches sprach mich an, aber zugleich etwas sehr Klares und Heldenhaftes, ein eigensinniger und tragischer Kampf um die Wahrheit, ein Preisgeben alles Angenehmen und Lieblichen, zugunsten einer inbrünstigen Suche nach dem Sinn des Lebens.(9)

「非常に孤独なこと、熱狂的なこと、明晰なこと、英雄的なこと、真理を求める頑固なまでのまた悲劇的な闘争心、快さや大事なものも人生の意味を見いだそうとする熱烈な探求故に放棄してしまうこと」

ここにHeldenhaftes、ein eigensinniger und tragischer Kampf um die Wahrheitというくだりが見えるが、ヘッセは自身の思想行動基準の根幹にEigensinn (eigensinnig, Heldenhaft)を据えているように判断できる。シュレンプフ自身の信

仰姿勢が敬虔主義的なものから自由主義神学的なものへと変化したときに、教会での牧会者としての権利・義務の遂行ができなくなることは予想されたはずである。にもかかわらず、彼はおのが信念を貫き職を辞した。この出来事に接し、ヘッセはシュレンプフの神学的背景に共鳴したというよりも、シュレンプフの行動姿勢、すなわちEigennsinnを貫くその姿勢に自身との共通点を見いだしたのであろう。それを契機に論文を送る事態になったのだと思われる。

ヘッセの思想や行動に見え隠れする、彼に影響を与えた人物として名前を挙げなければならないのは、いま引用したシュレンプフとならび、ニーチェである。神学校脱走事件の後、いくつかの仕事を経て書店に勤務することになる。そのころ集中的にニーチェを読んだようだ。ニーチェについてもやはりEigennsinnが共通点として挙げられる。従来の古典解釈を根底から変革することに端を発し、キリスト教に対する宗教心理的側面からの攻撃にいたり、ついには自身発狂せざるを得なかった人物がニーチェである。彼のキリスト教への非難の当否はさておき、時代のはるか先をみはるかすような、一種、預言者的側面にひそむEigensinnに注目する必要があろう。

この制度としての教会忌避が、しかしながら、即全面的なキリスト教忌避につながるものではなかった。ドグマを忌避し、制度としての教会にもなじむことのできなかったヘッセは、キリスト教に対していかなるイメージを持っていたのか。筆者の知る限りヘッセとキリスト教との接点で顕著なのはアッシジのフランシスコとの関係である。ヘッセはフランシスコに限りない愛着を抱いていたようである。両者の類似点ともいうべき点は、ではいったいどんなことだろうか。それに対して示唆を与えるのは、下村の発言である。

「フランシスの使命は既成の教会の改革でなく、本来のキリスト教的敬虔に還ることであり、組織された教

会や教義のキリスト者でなく、自由な単純なキリスト者に還ることであった。」(10)

フランシスコには教会という制度さえ越えてしまいかねない、信仰の素朴さ・純粋さをあこがれ求める気持ちがあるというのである。煩瑳な理論によって武装され、一般の信仰者には近寄ることさえむつかしく、たとえ近づきえたとしても、そこに見い出せるのは内実のない、ましてや潤いのない教会の状況であった。そんな状況の中で、圧倒的な行動力をもって、極限にまでつきつめられた、「無所有」という原則を一身に体現し、神を求めたフランシスコが現れた。先に触れたニーチェとは表面的には対照的であるが、強烈なEigennsinnの体現者という側面に関しては共通であろう。蛇足ながら、このフランシスコに魅せられ、ヘッセは彼を（正確に言えばフランシスコの幼年時代を）作品化しさえしたのである。その態度は、まるで自分一人だけの大事な宝物をかわいい手の中でいとおしむ幼児のようである。

以上Eigennsinnをキーワードとしてヘッセとキリスト教との関わりを概観してきた。敬虔主義はEigennsinnを含み、反主知主義的傾向を持ち、ヘッセが「私の信仰告白」と呼んだ作品*Siddhartha*にその（Eigennsinn、反主知主義的傾向）具体的現れと、その傾向と表裏一体をなすような、東洋の宗教への傾きあるいは関心、また修行論的傾向をみることができる。

*Siddhartha*においては、いったん思い詰めたあかつきにはその思いを貫かずにはいない頑固さで物語が始まる。主人公にあっては、それが最終的にはどのような結果を伴うものであるかなど、全く考慮の外になってしまう。人間的な意味での愛・喜び・成功・苦悩などを経験した後、理論や規則にのっとった生活によってではなく、老賢者と共に、絶え間なく流れきて絶え間なく流れ去る川のほとりに渡し守として生活の場を確保しつつ、絶えず川に聞き入り、

川の中にさまざまな形象を読みとる生活を送っていた。この場面設定はどこか以下に引く禅宗の逸話を思わせる。

「別にもう一人、生涯を船頭ですごし、文字通りに船子和尚とよばれた人がある。巌頭と同時である。船子は、往来の旅人のうちから、これぞと思う弟子の出現を待ち受けていたのだ。のちに夾山善会という、弟子がみつかる。・・・船子は善会に後事を嘱して、さっさと船を覆して死んだという。」(11)

シッダルタとヴァスデーヴァの邂逅の場面を思い起こさせる故事である。*Siddhartha*の全編を通じて読者に迫ってくるのは東洋的思惟方法に酷似した思惟内容である。湯浅の説明を引けば、以下のようになる。

「・・・東洋の伝統的形而上学の多くは、アリストテレスや古代キリスト教神学に代表される西洋の伝統的形而上学のように、知的推理による論証を基本目的にするものではないからである。それらはむしろ、一定の実践、ないし心身訓練の技術によってはじめて経験できるような内面的体験にもとづいて、人間と世界について考察する企てである。その意味からいうと、東洋の伝統的形而上学と、臨床的治療から始まる深層心理学の方法的視点は、本質的に相通じるところがあるのである。」(12)

これは修行論・身体論にも発展する可能性を秘めた、二つの形而上学的伝統の大胆な要約説明になっている。「義認による信仰」という側面と、「義認による信仰」を否定するものではないが、それ以上に「信仰の実を重視」する敬虔主義の伝統に近いものをこの作品に感じるのは筆者だけであろうか。

（聖学院大学非常勤講師）

註

Hesseの作品からの引用はHermann Hesse Gesammelte Werke. 12Bände . Werkausgabe Edition. Frankfurt am Main, 1970からとし、WAと記すことにする。

(1) 拙論「メーリングリストにおけるヘッセへの関心」筑波大学外国語センター紀要 一九号　一九九七年 参照

(2) Küng, Hans: Nahezu Christ? Hermann Hesse und die Herausforderung der Weltreligion. In Anwälte der Humanität. München 1989 S.234

(3) 拙論「Hermann Hesseの母親 Marie Heese」筑波大学外国語センター紀要二〇号　一九九八年　参照

(4) Gundert,Adele:Marie Hesse ein Lebensbild in Briefen und Tagebuechern.1977 Stuttgart S.207

(5) a.a.o. S.208

(6) WA10 S.71f

(7) M・シュミット著『ドイツ敬虔主義』小林謙一訳　教文館　一九九二年　二六頁

(8) WA10 S.250

(9) WA10 S.252

(10) 下村寅太郎著『アッシジのフランシス研究』みすず書房　一九七〇　二〇二頁

(11) 柳田聖山著『禅と日本文化』講談社　一九九一年　一三〇頁

(12) 湯浅泰雄著「ユングと東洋」人文書院　一九八九年　四三―四四頁